

## <大川小 還らぬ人へ> 空白の51分埋めたい

◎津波訴訟10月26日判決(2) 只野英昭さん

彼岸に入った9月20日、宮城県石巻市釜谷地区を訪れた只野英昭さん(45) = 石巻市 = が墓前に手を合わせた。

「内気でかわいい娘でした。いつか帰れるなら、この釜谷に帰りたい」

<元気な声を残し>

大川小3年だった長女未捺(みな)さん = 当時(9) =、妻しろえさん = 同(41) =、漁師だった父の弘さん = 同(67) = の3人を津波で失った。

墓の脇にピアノの形をした小さな物入れがある。東日本震災後に墓を建て直した際、ピアノが得意だった未捺さんのために備えた。

目を閉じると、ピアノの音色がよみがえる。リクエストに応じ、人気バンド「いきものがかり」の曲「ありがとう」をうれしそうに演奏してくれた。

2011年3月11日の朝、未捺さんを大川小の近くまで車で送った。5年生だった長男哲也さん(17)も一緒だ。

夜は、しろえさんの誕生パーティーを開くはずだった。車中はその話題で持ち切り。「行ってきます!」。元気な声を残し、きょうだいは2人の命運を分ける学校へと向かった。

海岸から約4キロ離れた大川小が高さ約8.6メートルの津波に襲われたのは午後3時37分ごろ。校庭から移動を始めたのは直前だったとみられる。巨大な揺れから50分近く、校庭に留め置かれた計算になる。

哲也さんは津波にのまれながら一命を取り留めた。未捺さんは震災から9日後、遺体で見つかった。眠っているような表情だった。

ホワイトデーの14日、未捺さんが欲しがっていた電子ピアノが届く予定だった。泣きながら電話で注文を取り消した。



墓前で冥福を祈る只野さん。未捺さんが好きだったピアノの形をした物入れも備えた = 9月20日

「死にたい」  
枯れない涙が頬を伝う。

<消えない違和感>

娘たち児童74人は、なぜ、安全なはずの学校で最期を迎えることになったのか。地震発生から約50分間、なぜ、近くの裏山に避難できなかったのか。

真実が知りたい。市と宮城県を相手に14年3月、原告の一人として仙台地裁に訴えを起こした。

釜谷地区には過去に津波が到達した記録がない。山あいにある入釜谷を除くと、釜谷地区の住民209人のうち約8割が死亡した。市側はその数字を基に「原告の主張は教職員やその遺族にとって酷」と訴えた。

市側の主張に耳を疑った。

「子どもは最期の瞬間まで学校の管理下にあった。自分の意思で避難できるはずがない。地域住民と同列に扱うのはおかしい」

釜谷の犠牲者に責任をなすり付けるかのような主張に、違和感が消えない。

休みの日はできるだけ、被災した校舎へ足を運び、教室を掃除する。娘に会える気がして心が落ち着く。

「ただいま!」。笑顔で帰宅する娘の姿が脳裏に浮かぶたび、「空白の51分」を埋めたい、と願う。

11年6月12日、3人の葬式を出した。あえて結婚記念日を選んだ。何年、何十年たっても別れの日を忘れないために…。